女性学評論　第31号　Women's Studies Forum No. 31（March 2017）

作家由起しげ子の輪郭

― 神戸女学院所蔵「由起しげ子文庫」資料より ―

藏　中　さやか

Outline of the Author YUKI Shigeko: Based on the Documents of YUKI Shigeko Collections of Kobe College

KURANAKA Sayaka

神戸女学院大学 文学部 総合文化学科 教授
連絡先：藏中さやか　〒662-8505　西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学文学部総合文化学科
kuranaka@mail.kobe-c.ac.jp

Summary

In this manuscript, I mainly focus on an introduction of the documents in Yuki Shigeko Collections of Kobe College Library, which was roughly organized in March 2016, while writing activities of the author YUKI Shigeko (1900-1969) has been described from several different view-points. Some documents of the Collections were investigated to show the details and newly discovered facts relative to previous explanations and works described in the chronological records.

First, I re-confirmed the personal criticism of her by examining documents on her interview after she received the Akutagawa prize in 1949, and introduced her views on culture and marriage. Subsequently, the involvements of the editor YAGIOKA Eiji was indicated based on the manuscripts, fairy stories, in particular, up to the same time, and I discuss the presence of her persistence as an author by showing traces of elaboration of the titles and names of characters.

Having identified the descriptions in diaries and notebooks, which are connected to her individual work, I attempted to make significance of her notes on work ideas that were derived from descriptions on the facts noted like on a memorandum book for each description.

Finally, I focused on 2 scenarios of 'Shiken Bekkyo', which is the original novel for 'On-na Gokoro' (HARA Setsuko as a main actress, February 1959, Toho Production) and another one in library materials, and clarified the relationship of the scripts and the original book, which was accompanied with a discussion from descriptions in a diary, and I traced the processes of the film adaptation of the literature.

Overall, with the new documents, in this present paper I was able to recognize new aspects of the author YUKI Shigeko, who had so far been strongly characterized by her many novels published in the mid 1950s, by re-examining chiefly work from the early years of her writing career.

Keywords: YUKI Shigeko, Yagioka Eiji, Hon no Hanahi, Shiken Bekkyo, On-na Gokoro, HARA Setsuko

要　旨

本稿は、2016年３月におおよその整理がついた本学図書館所蔵「由起しげ子文庫」の資料紹介に主眼を置きつつ、作家由起しげ子（1900-1969）の執筆活動について複数の視点から述べたものである。「文庫」資料を検討することで、従来の解説や年譜類に記されてきた事柄の詳細や新たに浮き彫りになる事実があることを示した。

まず、1949年芥川賞受賞後翌年の発言を載せる対談資料から、当時の由起に対する人物評を再確認するとともに、由起自身の教養観や結婚観等を紹介した。続いて、初期長編作品の執筆順に言及し、また同時期までの童話を中心とする原稿類から、編集者八木岡英治の関わりを具体的に示した。さらに表題や作中人物名の推敲の痕跡を示し作家としての拘りの所在について触れた。日記、雑記帳類からは個々の作品に繋がる記載を拾い上げ、事実を備忘録的に書き留めたそれらの記載がそのまま作品構想メモにもなっていること等を記載毎に意義づけた。最後に、原節子主演『女ごころ』（1959年２月公開、東宝）の原作小説である「試験別居」と「文庫」資料中の２種の脚本を取り上げ、日記の記述を基に考察を加えながら、文学作品が映像化される過程を辿り、作品の単行本化と映画公開に見える相互関係を明らかにした。

以上、従来、1955年ころから多く発表した中間小説が強く印象づけられてきた作家由起しげ子の一面を、活動初期を中心に見直し、新たな資料によって立体的に捉えたのが本稿である。作家の草稿を用いた研究の一事例でもある。

キーワード：由起しげ子、八木岡英治、「本の話」、「試験別居」、『女ごころ』、原節子

はじめに

本稿は、2016年３月に大凡の整理がついた本学図書館所蔵「由起しげ子文庫」（以下、「文庫」）の資料紹介に主眼を置きつつ、由起の作家活動の側面を複数の視点から述べようとするものである。「文庫」資料により、従来の解説や年譜類に記されてきた事柄の詳細が明らかになり、また新たに浮き彫りになる事実があることを具体的に示していきたい。

一

由起の作家活動開始期の様子を伝えるものには、芥川賞受賞後の記事や複数の自身による語りや随筆がある[1]。また自伝的な小説類[2]にもその前後の生活状況を窺わせる描写があり、吉村稠等によるこれまでの研究は、主としてそれらに基づき、場合によってはご遺族からの聞き取りを加え、進められてきた。

「文庫」にはこの時期の由起の発言を記す一編の未発表の座談会原稿がある。【その他27】「「女性の文化と女流の文学」座談会」である。この原稿は、その表紙に記されるところから、未刊となった『本流』第二号に掲載されるべく準備されたものと考えられる。『本流』は1950年２月に創刊号が刊行された「折口信夫責任編集」の雑誌で、創刊号には折口と小林秀雄との対談「古典をめぐりて」等が掲載されるが、第二号以降の刊行は確認できていない。本学図書館が國學院大學折口博士記念古代研究所に照会し得た回答によれば、同誌は休刊していた『國學院雑誌』の代替えの位置づけで刊行されたものとのことである。

---

1 「芥川賞受賞のあとさき（座談会）」（『文学界』14-9 1960）、「接ぎ木の枝―文学自伝」（『群像』14-8 1959.8）、「女性豆自叙伝」（『家庭朝日』1951年11月11日付）、「文芸随想」（『徳島新聞』1967年４月７日付）等。

2 「本の話」（『作品』3 1949.3）、「脱走」（『文学界』3-4 同.6）、「警視総監の笑ひ」（『文学界』3-7 同.9）、「厄介な女」（『人間』5-2 1950.2）、「告別」（『文学界』5-3 1951.3）、「指環の話」（『別冊文芸春秋』25 同.12）等の初期に発表した作品の他、「夕すげ」（『群像』8-2 1953.2）、『若い火』（河出書房 1956.2）、「やさしい良人」（『文学界』14-1 1960.1）等がある。

当該資料の表紙には「四月二十六日／本流二号」とあり、「出席者　文学博士 折口信夫先生／小説家 平林たい子先生／小説家 由起しげ子先生／（司会者）臼田甚五郎」と記す。ただし司会者の行は抹消線が施され「臼田は編輯部／とする事」と注記がある〔写真１参照〕。編集部（臼田）及び平林の発言箇所にはそれぞれ別筆で訂正が入ることから、座談メンバー間で回覧後、入稿原稿を作成するはずが、由起の手元に留まったままになったものかと推察される。折口、平林の発言を含む未発表原稿という点でも注目に値する資料で全文の活字化は別途予定している。

〔写真１〕【その他27】「「女性の文化と女流の文学」座談会」表紙部分

座談会テーマは「日本の女性問題と女性文学の運命」である。文学者臼田（1915～2006、当時は國學院大学助教授）が司会の任を担い、ともすれば拡散しがちな座談の場を文学的知見をもって集約することに努めている。話題は樋口一葉、与謝野晶子、岡本かの子といった作家への論評や『青鞜』等の文学観に及ぶ。平林がこの時点で執筆中であった自作「昭憲皇太后」（『面白倶楽部』光文社 1950）について述べるくだりや当時の太宰府天満宮宮司の発言等も見える。錚々たるメンバーの中で、由起の発言回数は少なく主張も控え目、また未定稿であるため論旨にはやや不明瞭なところがある。この座談会に由起が加わっているのは、前年1949年７月に「本の話」で戦後再開第一号の芥川賞を受賞した注目の新進女性作家というだけでなく、その夫伊原宇三郎が大阪府立今宮中学校時代の折口の教え子であった[3]ことも関わっていたのであろう。ここでは由起の発言部分にのみ注目し、断片的ではあるが当時の由起自身の考えを

3 【印刷物17】「「画家と作家のくらし―さまざまな愛のかたち」展パンフレット」（世田谷文学館編 2004.1）参照。伊原宇三郎は1953年刊の折口著書『かぶき賛』（創元社）の装幀も手がけている。

幾つか示すとともに周囲の由起に対する評価等を浮かび上がらせてみたい。

まず「本の話」の執筆経緯を問われた際の発言から引用する。

> その前（稿者注：「本の話」の前のこと）に「脱走」というのを書いたのでございますけれども、とにかく書き始めの動機なんですが、全然小説を書く気なんかなかったのでございますけれども、八木岡さんが小説というものを書いてごらんなさいと言われたから、小説というものはどんなものかと申上げたら、小学校の綴方を書くように書けばよろしいというものですから、私綴方の積りで書いておったのであります。だから私の小説といったら、私も不思議な気がしておるくらいだったのですけれども、いつまでもいつまでもそんなことを言ってたらおかしいと思ったから、今ではそんなことを言わないようにしております。それでも、去年から今年までの間には、随分そういう意識が深まって参りましたわけで、その気がなかったと思うというような、そういう整理をして、飜訳いたしておるような気持から、やはりはっきり書くものなら書きますという、そういう気持になって参りました。

発言には作家として進み行く覚悟が見える。編集者八木岡英治に執筆を勧められたという点は他の記事同様である[4]。特に注意したいのは、「本の話」以前に書いたものとして「脱走」を挙げている点である。例えば『群像』14-8（1959.8）掲載の「接ぎ木の枝―文学自伝」には「綴り方のつもりでやってごらんなさいと云うことだったから、父の死を作文した。そのすぐあとで、本の話を書いて、八木岡さんにおあずけして姉の看病に出かけた」とあり、従来の年譜類でも小説第１作は父の死を描く「告別」で、続いて「本の話」が書かれたとされてきた。しかし上記の由起自身の語りには「脱走」が「本の話」の前に書かれたとあり、「脱走」もまた「告別」とさほど離れない時期に執筆され

4　吉村稠「〈作家〉由起しげ子の誕生と出発」（『園田学園女子大学論文集』20 1986.3）参照。

た作品で、長編小説として「告別」「脱走」「本の話」が相次いで執筆されたと考えられる。この3作品については「文庫」中の手稿と関わらせて後節で再度取り上げたい。

由起はこれら長編小説について「(前略) 正確に考えてやったということではなくして、もっと急いでできればそれに越したことはないのでございますけれども、やはり書こうと思うだけでは長くなりそうですから、それに切れないでしょう。だからやはり長編で書いておいた方がよいと思って、途中で行き詰ったらしょうがありませんけれども、そういうものを書き上げたいと思っておりました」と述べ、長編構想を描いてから執筆を開始するような職業作家らしい執筆スタイルではなかったことを明らかにしている。

由起の作品が他の作家のものとは異なった雰囲気を持つことへの指摘はこの時点で既にあり、また作品批評も繰り広げられていた[5]。この座談会でも「赤い部屋」(『文学界』4-3 1950.3)[6]に西欧的な思想が自然に出ているという指摘があり、特に平林は由起が「実生活というものから離れられる教養と生活気分」を持っていると述べている。これは、裕福な家庭に育ち、音楽を学びながら画家の妻としてパリ生活を経験していたことを前提にした発言であろう。由起は自身が教養という観点から評されることについて、「文学にしろ教養と名前をつけられる程私は知っていない」「いろ〳〵な外国の小説のことなんかを思いますと、いろ〳〵な知識がもっと高いものがあって、読んでいても読みごたえがすると思うのでございます。そこに出て来る言葉の端々でも、何でももっと行き渡った知識というものが窺えると思うのですけれども、そういうようなものが余り問題にされていないような気がする」と述べる。また日本と外国との教養観の差異を捉え、「外国の人達が言っている教養というものは、こんな程度のものじ(ママ)やない」「もう少し専門のことに関しても、しっかりした答えができるようなものを持っている人が教養があるというのじゃないでしょうか」と

5 坂口安吾「由起しげ子よエゴイストになれ」(『文学界』2-3 1950.3)、「由起しげ子」(『週刊朝日』1950年3月5日号)や芥川賞選評(『文芸春秋』27-9 1949.9)等。

6 【原稿112】【原稿117】【原稿118】は同作品の草稿である。

述べる辺りは、やはり「西欧的思想」を身をもって知る者の発言と感じられる。折口も「しげ子さんの住んでおった家庭というものが、やはり世間が由起さんを非常に高い教養を持っているというように見てかかっているのだと思う」と発言し、ただ単に女性であるだけでなくその社会的地位が特殊なものであったことが、作家としての由起を、またその作品を理解する際の大前提や先入観になっていたことが窺える。

司会者臼田からフランスの家庭生活を問われた際には、日仏同じと答え、日本の家庭生活について「何か専門家という人」はそのために「沢山時間を取ってもよいという了解」があり、「まああの方は何か文章を書(ママ)かとか、そういうことを言われている程度では衆の中に出ることができない程度で、やはり男の人がすることと、時間において劣って、少しの時間をさいて世の中に出て行く程度」では「廻りの人が、それに志したということを認められない(ママ)」等と述べ、結婚生活に入って後は「そういう人は、やはり結婚する前にそういう志を持っていて、結婚するときに勉強するとかという気があれば、それはやはりどうして行けばよいかということを真剣に考えている。それを飾り物として考えるならば、それは家庭生活の中で楽しめる範囲内でする」と答えている。

日本の家庭生活に引き寄せた応答は由起自身の生活実感を反映した発言であろう。由起の結婚は、自身は音楽家、夫宇三郎は画家という芸術に関わる「専門家」同士のそれであったが、「幸福かどうかは最近…」という本人の発言からも窺えるように、その家庭生活は既に行き詰まった状態にあり、折口もこのことについては知っていたかと推察される。当時、現実の家庭婦人が置かれる状況は、平林が「(前略) 日本の家庭生活が女を家事に縛りつけている」と発言するような有様であったが、真に学びと対峙しようとする家庭婦人の立場を説くことばは、由起自身の訴えでもあり、強く響く。

由起は「あかちゃんにおっぱいを飲ませたり、子供の世話ということとか、そういうことに関しては本当に離れるどころじゃない。本当に密着している気持なんです」と述べるように母として生きる点においては懸命であったが、妻として家政を取りしきり夫に尽くすといった当時の良妻像からは遠い生活で

あったらしい[7]。

> 男の人に務めるとか、何とかいうようなことは、そんなことはとかく半ぱな性格を持っているのじゃないかと思います。務めるということは、何か外のことで以て変えることができる。（中略）今まで習慣では出掛けるときにオーバーを着せるなどということもありましょうけれども、それは習慣であって、若しそういう習慣がなければそんなことは愛情の印しではなだ(ママ)ろうと思います。併し、皆奥さんという者は、そういうふうにいろ〳〵なことをするという習しがあるので、それをしなければ愛情がないというふうに決めてしまう。そういうことで愛情を指定されるということは間違いなんです

という発言には、自身も置かれてきた妻という立場に備わるある種の義務感や、世間の習わしに対する反発といった気分が横溢するが[8]、このような夫婦観が、後に男女の愛情に関わる多くの作品を描く基盤になっていたと考えられる。

舟橋聖一の芥川賞選評には「私は、まだ、由起しげ子の取り澄ましたような気品は、信用していない。且つ、この婦人が、高名な画伯の夫人だと聞いて、よけい、賞をやりたくなくなった」とある[9]。ここからも看取されるように、

7　この点については、【日記４】に見える夫宇三郎に関する記述から窺うことができる。また1949年秋頃の宇三郎側の発言を収録する資料として【印刷物22】「芥川賞の蔭に秘められた伊原宇三郎画伯夫妻　宿命の夫婦愛物語」（『ホーム』3-11 ハンドブック社 1949.11の校正刷（９月付け））がある。ここでは、パリ在住時も帰朝後も「女中や家政婦を常に二人」おき「しげ子が家事による疲労でその健康や才能をちっとも摺りつぶさないですんだ」こと等が語られている。

8　例えば、【日記４】に記される1947年のメモには「何故女の人が男に対して扶助を要求するのか、世間の習慣がそうであるから自分がそれと同様のことを無反省に要求してよいのか」とある。夫婦別居を選択する過程でも「世間の習慣」というものに対する由起なりの拘泥があった。

9　『文芸春秋』27-9（文芸春秋新社 1949.9）。

由起は既成の文壇に属する作家とは異なる世界に育った女性であり、それ故に文壇においては独自の位置を獲得する。終戦直後という時代にあって文学的営為に携われる階層は限られていたが、その中にあっても由起は庶民的生活からは離れた暮らしを経験している教養ある女性であった。しかし、また一面では母や妻という立場の女性と共感を分かち合える作家でもあった。女性の社会的地位が変容してゆく時代にあって、由起自身の生活体験そのものが、この後、様々な女性像を描く中間小説に属する作品群を生み出す土壌となったのである。

二

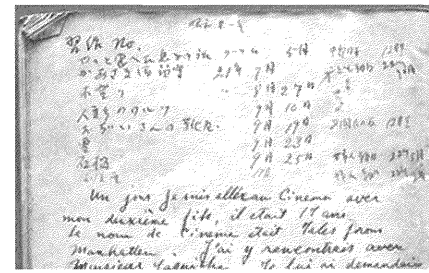
前節では芥川賞受賞翌年の発言を紹介したが、「文庫」の手稿類は、特にこの時期辺りまでの童話や初期小説に関するものが多い。夫婦関係の変容、複雑化する家族関係の中で、1945年に夫との別居を選び自身は転居を重ねるが、そのような中でも散逸することがなかったのは生活に困難を極めた終戦から数年間ほどのものであった。それは、これらが由起の人生の中で極めて重要なものであった証しであろう。そして「文庫」中に多く遺る日記や雑記帳は、個別の作品と由起の日常生活とを繋ぐ。記事は断章的であり、また後日にまとめて記した覚書であることも多く、さらに日記の記録日は限られている。が、場合によっては個人の心奥にまで分け入ることになる独白も見える。本節では特に、童話作家から小説家に至る時期の資料に注目してみたい。

童話作家となっていく由起[10]の行動は、「落第」(『改造』32-7 1951.6)という作品の主人公万幾子に重なる。「彼女は物をかくことに大きな望みや野心を持っているわけではない。あまり害毒を流すようなことを書かないで、つつましくどこかの紙面に採用してもらい、モデストな原稿料を頂戴できれば望外のしあわせだというだけのことである」という万幾子の心情描写は、金銭的事情

10　吉村稠は「由起しげ子文芸の形成したもの—女性の自立の意識とエゴイズムの確立—」(『日本文学』30-6 1981.6)で、「童話創作と童話集の出版によって、自己の世界観の基盤となる〈母〉の意識の確立を成し得た」と分析する。

から執筆活動を開始した当初の由起の心の声に重層する。

具体的に活動初期に触れるのは①『日本現代文学全集91 神西清・丸岡明・由起しげ子集』（講談社 1966）所収の年譜（近藤智雅子作製）、②『女性作家シリーズ６森茉莉／由起しげ子／萩原葉子』（角川書店 1998）所収の年譜（執筆：中地文）である。②は①の記載内容を踏襲したものと言えよう。両者は、1947年から翌1948年にかけて短篇童話を二十篇ほど書き富本一枝より当時中央公論にいた八木岡英治に紹介されたことを、また、1948年12月に八木岡の勧めで小説第１作「告別」を書き上げ「宇野浩二に推奨され」（①）、「とても処女作とは思えないという評価を得る」（②）が、「発表をひかえ」（①）たことを記す。



〔写真２〕【その他自筆36】「雑記帳」昭和廿一年童話作品題一覧部分

しかし、【その他自筆36】「雑記帳」に含まれる「昭和廿一年　習作No.」と記された童話作品題の一覧〔写真２参照〕と、1947年の日記から、これまで提示されてきた内容にはその時期や順に誤りがあったことが判明する。作品題の一覧は、間に仏語のメモ書きを記し「雨傘」以下の二作示す。掲載誌の記載と「雨傘」以下は後の加筆である。整理すると次の通りである。

昭和廿一年

習作No.			
やっと□（判読不能）へた息子の話　グリム	５月	中部日本	12月号
かあさま御留守	21年７月		
木登り	８月27日	子ども朝日	22年10月
人形のワルツ	９月10日		
おぢいさんの靴屋	９月19日	少国民の友	12月号

雪	9月23日		
石榴	9月25日	婦人朝日	22年5月
おほ雪	11月	婦人朝日	22年2月
雨傘	10月	―>童話教室へ送る	
(紅葉)	11月 8日9日		

一覧上、最初に執筆されたのは「グリム」と記す「やっと□へた息子の話」である[11]。「□」は存疑ながら「震」若しくは「曾」に近い字体である。現在確認できるグリム童話の表題に該当するものは見えず、年譜①に載る「『アラビアン・ナイト』(「ふるえる話」)」とも考えられるが、詳細は不明である。また最初の発表作品となったのは「おぢいさんの靴屋」で、掲載誌は1946年12月刊行の『少国民の友』23-9(小学館)である。

この他、【その他自筆36】「雑記帳」中の1947年3月の日記には、「純潔性の価値」「シンデレラ」「密(ママ)蜂と雀 四百字童話」の執筆が記される。また小学館及川甚喜氏に「かあさまの留守」「おぢいさんの靴屋」の原稿返却依頼をしたことも見える[12]。「密蜂」は『こどものまど』2(新子供社 1947.5)に載る「みつばち」を、「雀」は【原稿72】「雀のお手紙」のことを指すのであろう。

「おぢいさんの靴屋」以降、童話作品の発表掲載は昭和22年すなわち1947年と翌年に集中し、14篇が『春を告げる花』(時事通信社 1950.3)にまとめられていることは指摘されてきたが、創作童話、翻訳童話の執筆自体は戦後間もない1946年後半に集中して行われていたことが裏付けられた。

そして童話作品の発表掲載が連続するこの時期に既に第一作目とされる長編小説「告別」が執筆されていたことも明らかになった。作品内容に関わる事柄は後述するが、1951年3月に『文学界』5-3に発表された作品「告別」は、【原稿35】「告別」により、原題「送別」、筆名「伊原しげ子」としてその原型が執

11 その掲載誌「中部日本 12月号」は、昭和22年10月号が創刊号である中部日本倶楽部発行の『CNC』の12月号かと考えられたが当該書には記事が見あたらない。

12 ペンのインク色から或いは後の月になって補筆したものかとも思われる。

筆されていたことが判る。【その他自筆36】「雑記帳」、【その他自筆38】「雑記帳（日記等）」より、それは1948年のことではなく1946年半ばであり、また完成直後に宇野浩二の批評を受けていたことも確かめられる。

この執筆に関わる記述は【その他自筆38】「雑記帳（日記等）」1947年６月６日条に宇野浩二の名とともに次のように見える。

> 送別半ペラ四十九枚まで書いて創芸社へ電話。「宇野さんのこと折角ですがお断り下さい」とことづける

さらに【その他自筆36】「雑記帳」の同年６月のことを記す日記部分から「送別」について記す部分のみ摘記すると次の通りである。

> ６月８日八木岡氏を訪ねる。送別原稿頂く
> ６月12日「送別」清書

８日に八木岡の目通しを経た原稿が返却され、12日に清書しているが、この清書は宇野浩二の批評を受けるためになされたものであった。13日には以下の記述がある。

> 夕方五時頃、八木岡さんがゐらして明日宇野浩二さんに送別を見せるからしっぽをつけてとおっしゃって、ひるねしたりトランプをしたりして待ってくださる。雪―□□（判読不能）のことなど書き終へて、九時半、おかへりになる。

16日の当該部分は以下の通りである。

> 私はもし宇野さんが送別をよいと云って下さったらそれは一つのきっかけになると思ふ。世間的な意味でなくしなければならないことについてあゝその批評について私（ママ）驚くべきほど冷静だ。諦めといふよりも自分を知りす

ぎ、あまりに自分の心でありすぎるために、たゞそれが生活と結びつくとき自分が生きてゆき易くなっためん(ママ)期待する。本質的な意味では私はたえず精進したいと思ふ。それは宇野さんから批評して頂くことの中になく坂口氏[13]のなかによさをみつけたり、ショパンのプレリュードの一節に永遠につきない美しさを発見したときにだけ、幸福なのだ。

批評は17日に中央公論社で伝えられた。間接的に、「十年書いていた」人と評したことが聞かされたようだ。短く以下のように述べている。なお、「千疋屋のこと」は不詳であるが、由起が拒絶されたと感じるような振る舞いがあったか。

三時半、中公にて宇野氏のことを承る。十年書いてゐたといふことは~~善い~~良いといふことと同じではなくその反対のことが想像されて心が沈んでしまった。
千疋屋のことはそのことが何でもないのに用事があるなどゝ云はれたことで、殆ど運命的に不快になり絶望した。

文壇とは縁の無い「女流作家」のデビューのために八木岡が設定した宇野への作品紹介は、由起自身にとっては「きっかけ」として「冷静」に受け止められる。むしろその肩で担わねばならない「生活」というものが透けて見えていたのであろう。後に、芥川賞選考委員の立場で「本の話」に対して「ちょっと、うまそうに、見えるところもあるが、『しろうと』のようなところが多分にある」と論評[14]した宇野が、この時に「十年書いてゐた」と発言したことばは、賛辞として響くだけではない。切磋琢磨する場に出ることなく長年独りで書き溜めてきた素人作家という意味にもとれることを、由起自身が「反対のこと」として嗅ぎ当てている点も注目される。

13 【その他自筆38】「雑記帳（日記等）」にもその名が見えるが不詳。
14 前掲9同誌。

以上より、従来の見解よりやや早く、1946年中盤以降に集中して少なくとも10篇の童話が書かれていたこと、また1947年6月には長編小説「送別」（発表時「告別」に改題）は既に原型が書き上がっていたこと[15]、さらに1948年12月とされてきた宇野浩二による批評もその時点で受けており、その評言は「十年書いてゐた」という表現を含むものであったことが事実として判明する。

童話作家から小説家への転身を勧めたとされる編集者八木岡は、当時、『婦人公論』の編集長であった。由起しげ子の遺品整理にも関わりその書斎にあった素九鬼子の作品『旅の重さ』（筑摩書房 1972）を世に出した人でもある。長く由起の執筆活動の伴走者であった。「文庫」資料にも、日記や雑記帳の記述の中にしばしばその名を認める[16]が、続いて初期の原稿類に遺された八木岡の影を追ってみたい。

「文庫」中の草稿を含む童話原稿で作品全体が揃っているのは、【原稿24】「雨の日」（無題・筆名記入無）、【原稿31】「おぢいさんの靴屋」（無題・筆名記入無）、【原稿40】「ざくろの庭」（原題「石榴」を発表時改題・草稿中に伊原しげ子と記すもの有り）、【原稿54】「みけとらとこいぬ」（無題、ただし六枚目裏に表題「みけとらと小犬」を赤鉛筆で記入・伊原しげ子）、【原稿61】「雪に埋まったジープ」（原題「おほ雪」を改題・伊原しげ子）、【原稿64】「お人形のワルツ」（筆名記入無）、【原稿72】「雀のお手紙」（無題、ただし二枚目裏に「電報童話雀ノオテガミ」と記入・筆名記入無）、【原稿139】「雪」（伊原しげ子）の計八編である[17]。

15　この他、6月26日には「捕虜の原稿」とあり、捕虜を扱う作も執筆されていたことが判る。また同時期に「鮭」を書き「中公」に届けたとの記載も見え、【原稿69】「鮭」のことかと考えられる。「鮭」には「二十二年六月十八日朝」、「不要」、「先生御加筆故保存」のメモ書きがあり、作品内容の一部は後に発表した「捨てる」（『文学界』17-6 1963.6）に生かされている。

16　例えば、【日記5】1955年3月には「この門を過ぎて」（『群像』10-5 1955.5）を出稿したあとの感慨が綴られるが、そこには雨の夜に2，3時間おきに現れて激励してくれた八木岡への感謝のことばが述べられている。

17　これらの他に書きさし原稿がある。

このうち一枚目に表題と筆名伊原しげ子とを記す【原稿139】「雪」には、六枚目裏に記入時期の異なる二種の自筆メモが残る。原稿を八木岡に送付した時のメッセージ、或いは清書原稿に添付した手紙の下書きかと考えられる。

原稿／今朝かきました／これをさきにおよみ下さればうれしいと存じます／こんなものを五つ六つ書いて／まとめたいと思ってゐます／御批評の御言葉を頂きたいと／思ひます

・

もう一種は「23.7.5」という日付とともに次のようにある。

雪／昭和廿一年九月／これは手紙と一緒に八木岡様に／郵送したもの私はこの頃／まだ八木岡様をよく存じ上げなかった（空白）そしてどんな御批評が／頂けるかと胸を躍らせて待って／ゐた（空白）お手紙が速達で／（空白）伊原しげ子先生様として／来て可笑しくて吹出してしまった

これは「雪」を執筆した昭和21（1946）年９月のことを昭和23（1948）年７月５日に回想して記したものである。先述の作品題の一覧には「９月23日」という日付が記されていたがこの資料の「九月」とも一致する。

この他、【日記４】より、【原稿54】「みけとらとこいぬ」についても執筆時期が確定できる。当該資料には1948年後半のメモ程度の覚書が記されるが、その中に「十一月三日みけとらと小犬を書く」、「十一月十七日退院　病院にて短篇ジュリアンをかく」といった執筆に関わる記述がある[18]。

また【原稿61】「雪に埋まったジープ」は「（ペンで抹消）夫 雪」から改題した痕跡を留める資料である。この改題は【原稿139】「雪」との類似を避ける意図があったかと推察される。42枚目の裏側には「おほ雪／雪（空白）雪に埋まった／ジープ（空白）原稿（空白）おぢいさんの靴屋（空白）八木岡先生／御加筆」とい

18 「ジュリアン」については未詳。或いは外国童話の翻訳作品か。

う覚書がある。全体に、黒と青による加筆訂正が見られることから、当初原稿をまず改稿して加筆、さらに最終的な加筆がおこなわれたと想像され、覚書の記載から、その加筆は八木岡によるものと考えられよう。

金銭的必要に迫られた初期の執筆活動は八木岡に支えられたもので、八木岡は編集者として駆けだし作家の文章に助言を与えたのであった。「本の話」の執筆の詳細は日記類に確認できないが、【日記４】の八木岡の名を記す箇所の中には「1948年12月17日　本の話　二万円内金をもらう約束をして帰る」[19]という一節がある。翌1949年３月には「本の話」は八木岡が編集する『作品』３に掲載され、７月には芥川賞を受賞し、10月には「警視総監の笑ひ」「脱走」「本の話」をまとめた最初の単行本を文芸春秋社より刊行する。八木岡という編集者の支援を受けた文壇デビューは、「二万円」という対価を得て始まったのである。

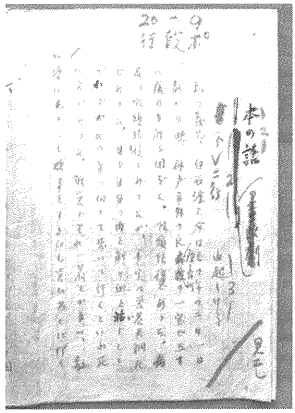
なお、童話作家からスタートした由起の一面は、その後も、【印刷物143】脚本「北風の笛」(1950)[20]や「瑠璃色の海」(『少女の友』45-1-3 1952.1-3) やオルコット原作の翻訳である『美しいポリー』(『世界名作全集』147 講談社 1956)、「かくれ山の少年たち」(『６年の学習』12-1-11 1957.4-1958.2) 等の児童を対象とした作品中に、垣間見ることができる。

三

「文庫」資料には、多くの手稿が含まれる。これらには、構想段階のメモレベルのもの、書きさし、書き損じの他、草稿、入稿原稿等があり、個々に丹念に追うと執筆の進展に伴って文章が転移していく様が判明するものが少なくない。作品毎の詳細な内容変遷については、今後の研究に委ねることとし、本節

19　芥川賞の賞金は５万円であった。「新・人国記　大阪府前編（７）」(『朝日新聞』1964年４月23日付）には当時を回想した「(実姉の）入院費用のうち毎月１万円は、わたしが面倒を見なくてはならぬ。当時、売り食いで、月に一、二回童話を書いては、五枚で稿料三百円といった暮し」との談話が載る。

20　同作品は単行本『ルリ色の海』(同和春秋社 1955) に再録される。



〔写真３〕【原稿20】「本の話」
冒頭部分

では可能な限り多数の資料を提示しつつ執筆に関わる事柄について述べてみたい。

前節で童話の表題の推敲について触れたが同様のことは他にも見える。例えば【原稿60】「野性の母」は原題「腕くらべ」であった。また既に指摘されるところであるが、芥川賞受賞作品である「本の話」という表題もまた変更されたものであった[21]。【原稿20】【原稿26】【原稿33】等から当初のタイトルは「あるクリスマスまで」であったが、「クリスマスの童話劇」に改められ、さらに「本の話」に改題されていることが確認できる〔写真３参照〕。なお、この最終表題の「本の話」は墨筆によるが、作品末尾の「いつたい」という一語も同筆跡による加筆と認められ、これも含め八木岡の所為と考えるべきかもしれない。

他にも改題例はある。先述の通り、童話に引き続いて発表し芥川賞を受賞した「本の話」より前に書かれていた作品の一つが「告別」である。両作は自伝的な作品であり、「本の話」は姉幸子の義兄馬淵得三郎の遺した書籍類に纏わる出来事が、また「告別」は1945年の父の死の床に駆け付けた事実がもとになっている。【原稿35】【原稿36】はこの「告別」の手稿二種でいずれも草稿段階のものである。【原稿35】の表題は「送別」で、筆名「伊原しげ子」の名を記すことから、原題「送別」が、発表時に「告別」に改題されたものであったことが確認できる点は前節に述べた通りである。なお、無題で筆名も記さない【原稿36】は、【原稿35】より後の段階のものであるが、発表作品とは、主人公名や章立て等異なる点がある。

このころと同じ時期のできごとを描く作品が1949年に発表された「脱走」で

21　前掲３同パンフレット。

ある[22]。「一」に示したように、由起自身が「本の話」の前に書いたと述べている作品である。【原稿47】【原稿48】がこの「脱走」の手稿二種であるが、【原稿48】が元稿で、これを一旦清書しさらに加筆したものが【原稿47】「脱走」という関係にある。【原稿47】は、「中央公論社出版文化研究室」の原稿用紙を用いた11枚で、作品冒頭部分に相当する。注目すべきは、ここに伊原しげ子でも由起しげ子でもなく、「立花茜」という筆名が記されていることである。由起と名乗ることが決定する以前に書かれていたものではないだろうか。筆名の「由起」は姉「幸子」に由来するものとされるが、当初、筆名として用意されていた名は「立花茜」であったことが思量される。

この「脱走」は手伝いとして家に入れた男に金品をごっそり持ち去られるという実体験を基に描かれた作品である。この男の「脱走」事件は、「送別」執筆の半年後、1947年12月のことと特定され、「脱走」の執筆は事件後余り程を経ないころかと考えられる。この事件のころのことを記す【日記４】には、「十二月二日すきやき。怖るべき。／藤原のことで私は憤った」、「十二月六日藤原脱走。十三万[23]三ケ日。六日銘仙を千三百円で売る／新宿いさみやで」等とごく短く記されるが、これらは執筆時には作品構想メモともなったものであろう。[24]

初期作品は、共通して自己体験を小説にしている。断片的であれ、日記や雑記の中に関連記述が具体的に見受けられるこれらの作品は、生々しい記憶がまず備忘的に書き留められ、やがて執筆に結びついていった結果なのである。

さて、表題の変更については、掲載誌の編集者の意向等、他者の意見による

---

22 【その他自筆38】「雑記帳（日記等）」の1949年５月29日条には「伊原より、脱走の件、お前にこれだけの文才があるとは思はなかった云々、認識不足」という記事がある。

23 「万」は重ね書きのため不鮮明。或いは別字か。

24 例えば、1949年に記された【その他自筆２】「雑記帳（日記）」には姪蕗子のことを記す詳細なメモが記され、73～80の頁数が記される草稿８枚が挟み込まれるが、この草稿は「警視総監の笑ひ」の「二」後半の蕗子とさわ子の対面場面である。また1960年に記された【日記７】中のメモは、娘由利子の病状を記す「一年の間に」（『群像』15-10 1960.10）と結びついている。

ことも考慮すべきであろうが、作中人物名の変更は作家個人の嗜好によるものとしてよかろう。由起には間違いなく作中人物名への拘りがあった。

【原稿21】「リヴィエラの雪」の登場人物ハインリッヒと杉子は、【原稿62】の草稿段階ではポウル、澤子であった。また【原稿46】「大事な人」には「浩司という名はそれほどすきではありません　お変え下さりませ　耕造？」というメモ書きがあり、発表作品では耕三という名になっている。

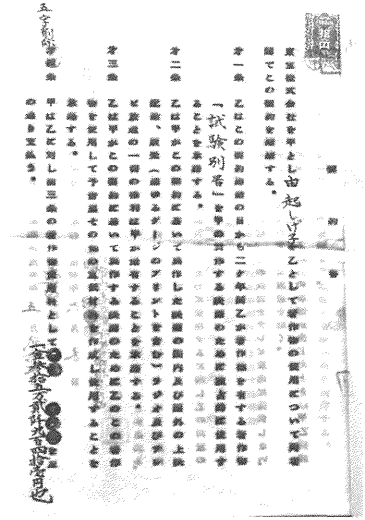
先述の【原稿48】「脱走」の場合は、安川はつきとあった名が発表作品では鴻ノ巣増代になっているだけでなく、調律師の名を吟味検討する走り書きが残り、当初は安本悦司とされていたその名が、采女寅直に修正されたことが判る。付言して内容に関わる点を述べれば、この調律師来訪のエピソード自体が、当初の「画描きの菅」という人物の来訪から書き換えられたものであり、作品構想の変遷を追う点からは興味深い。

以上、初期作品の手稿類から、書き直しの痕跡が鮮明に確認できる数例等も示しつつ、由起の執筆活動の一端を辿ってみた。日本近代文学館編『近代文学草稿・原稿研究事典』（八木書店 2015）には手稿を用いた研究手法が多数紹介されているが、「文庫」資料においてもそういった手法の適用が可能であり、作品個別に今後の研究進展が俟たれる状況である。

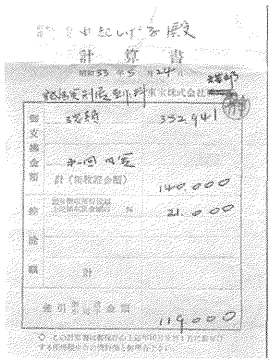
四

手稿と並んで「文庫」の一角を占めるのは、由起の作を原作とする映像作品に関わる脚本類である。今後、これらは映画やテレビドラマの歴史を考える際の貴重な資料となるものであることは間違いない。本節では、その一つである「試験別居」に関連する事柄を述べてみたい。同作品は、身勝手な夫朝吉の不倫による「倦怠期にある三〇代夫婦の危機」を描く。新築のマイホームで男児研一を育てる主婦伊曽子の幸せな暮らしが、夫の不倫発覚とともに大きく揺らぎ別居に至るものの最終的には元の鞘に収まる、というストーリーである。

「文庫」には1958年６月に『主婦之友』42-3に掲載された「試験別居」（同年12月に文芸評論新社から刊行された『女ごころ』に所収）を原作とする二種



〔写真４〕【その他31】「契約書」冒頭部分



〔写真５〕【その他31】「契約書」添付の計算書

の脚本（【印刷物137】「美しき争い」、【印刷物177】「秘めごと」）と、東宝に原作を提供することを約する契約書１通（【その他31】）が蔵されている。加えてこの頃の由起の生活上の動静を伝える資料として【その他自筆７】「1958.11月桜ヶ丘にて」[25]がある。当該資料は後半未使用の市販ノートである。小説の下書きか構想かと思われる記述の後、1958年10月28日~11月６日までの簡略な日記が書かれ、音楽会チケットの半券や電報文等が挟み込まれている。

「試験別居」を原作とする東宝映画は、丸山誠治監督、森雅之、原節子の共演に団令子、丹阿弥谷津子等を加える配役で、1959年２月『女ごころ』として公開された。脚本化に際して交わされたのが【その他31】「契約書」で小紙片の「計算書」も添付されている〔写真４・５参照〕。「契約書」は「昭和三十三年五月二十七日」付であり、添付の「計算書」には同年５月24日の日付がある。また「契約書」では「著作物の使用料」と記載される費目は、「計算書」では「試験別居原作料」とある。金額は総額352,941円。第１回が同年５月27日に支払われ、残りは６月

25 「桜ヶ丘」は同年10月に転居した新住所。

末日と明記されている[26]。

当時の由起の原稿料はどれほどであったのであろうか。「文庫」中には原稿料の明細も複数存在するが、同時期のものとなると【その他自筆７】に挟み込まれた婦人之友社発行の「貴稿料計算書」が参考となる。12月13日付のこの計算書には、「婦人之友１月号原稿料3200／所得税480／差引御支払額2720」とある。これは、翌1959年１月刊行の『婦人之友』53-1に掲載される「“話し合える社会に”近づこう」という特集の「さし迫らないうちの話し合いを―家庭や社会では」という表題で書かれた1.5頁分（約1400字、400字詰原稿用紙約3.5枚）程の原稿に対して支払われたものである[27]。これと比較しても、既に執筆した作品が他者（この場合は田中澄江）によって脚本化され映画になるということは、作家にとって大きな収入をもたらすものであったことが判る。

「文庫」中の脚本二種は【印刷物137】「美しき争い」、【印刷物177】「秘めごと」で、映画タイトルとも原作とも異なる表題である。双方とも配役等の詳細がなく最終稿ではない。うち【印刷物177】には次のように青ボールペンによる手書き修正が１箇所ある。

研一、得意になって空缶から魚を~~三匹水槽の中に入れる~~。みせる

【印刷物137】「美しき争い」にはこの加筆修正はなく、またこの他両者には、冒頭シーンや子供である研一の亀の写生シーン、肉屋の御用聞きのシーン、喫茶店での学生の結婚式シーンの有無等、幾つかの相違点があるが、映画との照

26　作家の原稿料刊行会編『作家の原稿料』（八木書店 2015）によれば、1954年の室生犀星「性に目覚める頃」映画化（東宝）の際の原作料が40万円、1958年の志賀直哉『暗夜行路』映画化（同）の際の原作料が200万円、1964年の高見順「いやな感じ」映画化（同）の際の原作料が100万円であった。

27　前掲26同書「昭和32年（1957）」項には城山三郎の原稿料が１枚700円、「昭和33年（1958）」項には「星新一「ボッコちゃん」の原稿料は400字詰原稿用紙１枚あたり100円、手取り80円だった。ラーメン一杯40円の時代だった」、吉村昭が初めて得た原稿料が１枚1500円といった記載がある。また同「昭和35年（1960）」項には「高見順、雑誌「世界」「文学界」「群像」は１枚1000円の原稿料なので、中間小説の執筆をしないと、生計が成り立たない」とある。

応により、【印刷物137】「美しき争い」の方が映画に近い脚本であることが確定できた[28]。夫婦間の機微や妻の心情、また夫の不倫相手である女の心模様をより鮮明に描き出すために、脚本の書き換えがなされたものであろう。

なお、脚本にはもう一種「妻と愛人 準備稿」と題するものがある（早稲田大学演劇博物館蔵）。この「登場人物」項には、原節子、団令子の名が刷り込まれ、裏表紙には「33年７月31日70部」の記入がある。撮影開始に近い時期の刊行と考えられるが、映画では冒頭、末尾等はこの脚本ではなく【印刷物137】、「美しき争い」の内容となっている。

この映画の撮影にあたっては伊豆でのロケが実施された。原作者として由起も同行していることが映画宣伝を兼ねたと覚しき雑誌記事から判る[29]。「原節子」の名を付して記される文章には、いでゆ号乗車から開始したこの旅について「はじめて映画のロケーションにやってきたという先生（稿者注：由起のこと）といろいろ女の幸福ということで問答をかわした、伊豆長岡の旅館での思い出深い二日間―。そこからハイヤーで三十分、畑地を横切り西海岸の牛臥に出ますが、ここは紺一色の海面が目を射るような別世界」等と記される。

このロケ同行の旅に関する日記は【その他自筆７】「1958.11月桜ケ丘にて」中に見える。行程や出来事の摘記を含め、この旅の様子を紹介してみたい。

10月30日３時に原節子、望月規久子氏（東宝）と東京駅で待ち合わせ、北浜のすずめずしを食べ、６時に伊豆長岡着、丸山誠治氏とロケ隊は既にさかなや旅館に宿泊、自身も同旅館の萩という部屋に入る。宿では隣室の騒音や風呂番との喧嘩等の出来事があった。

翌31日には沼津御用邸の横（牛臥海岸）で行われたロケの様子を見学し、「原節子、丹阿弥氏、浜辺で歩くところばかり／陽が照ったりかげったり　しかし

28　神保町シアター「一周忌追悼企画伝説の女優・原節子」（2016年８月27日～９月30日）で21作品中の一つとして当該作品が上映された際に鑑賞した。

29　1958年12月21日発行の『週刊女性』51（主婦と生活社）に「東宝映画「女ごころ」から　晩秋の伊豆海岸」という見出しの白黒写真四葉を含む２頁の記事が掲載されている。

風あたたかく砂浜で／ボンヤリしているうちに風邪が治ってくるのがわかる／それでもう一泊の気になり、八木、通夫にデン報／アスカエルユリコタノム夜丸山氏辞す　油虫／部屋変わって「菊」の２」と書いている。

11月１日には「陽があるようだがロケには不足とのことで午前中やすみ／何方も寝ている　丸山さん一寸部屋に見える／一時出発　望月さん丹阿弥さんと沼津から帰京／わさびづけとシューマイを買って東京駅からTAXI（下略）」といった記述が続く。

付言すると、さらにその十日後にあたる11月11日には「東宝　望月規久子さん来　シナリオあづける」とある。撮影進行中の時期であろうが、由起がシナリオを手元に置き、望月氏にそれを託したことが記されている。ただし、この折の「シナリオ」の表題等については記述はなく、由起が脚本に対してどのように関わったのかも不明である。

この映画の原作となる「試験別居」は1958年12月に文芸評論新社から刊行された単行本『女ごころ』（256頁、装幀は長男伊原通夫氏が担当）の冒頭作品として「試験別居」の表題で所収されている。同書は「試験別居」「雨の日の客」「奪えぬひと」「特号夫人」「女が生きるとき」「誕生日の贈物」「秘密」から成るが、複数作を一括する単行本のタイトルは所収作の一つであることが多いことを考えれば、この『女ごころ』というタイトルは例外的なものであろう。

またこの書籍には表紙装幀の絵柄とは無関係に幅広の帯が付属している〔写真６参照〕。帯の表には映画中の男主人公（森雅之）と二人の女性（原節子、団令子）の写真と「＝夫に裏切られた妻、妻に背かれた夫＝女心、男心の織りなす愛と憎しみの物語」のコピーが、また裏には男女主人公（前田、原）の写真が配される。さらに帯の背文字に「由起しげ子東宝映画原作」とあり、一目で、映画

〔写真６〕『女ごころ』表紙・帯

化と連動した刊行であり、翌年２月の映画公開を前提にした出版であったことが判る。

この発刊に関わるメモが【その他自筆８】「雑記帳」の中に挟み込まれている[30]。当該の雑記帳は1958年５月８日から７月24日までの記事が認められ、ニュートン力学や量子物理学を扱う文献をまとめた内容等が記されるものである。この横長一枚のメモに万年筆により縦書きで記された内容は以下の通りである。■は一字の塗抹を表す。

1　秘密（公園）　70
2　特号夫人（女流新潮）　70
3　誕生日の贈物（新潮）　30
4　女が生きるとき（オール）　70 ―― 不在（注：線と文字は赤鉛筆）
5　試験別雨の日の客（朝日）　35
6　試験別居（主婦）　35 ―― （注：線は赤鉛筆）計300枚

○標（ママ）題は「女ごころ」でも可

○中の各篇ごとに別紙で題名を入れ、「試験別居」の分だけ題名の裏に映画「女ごころ」の原作なるむね一行入れる。

○後がきをかんたんに入れる（裏表誌名も入れるとよい）

――近頃の男女の愛情を主題としたものをえらんで一冊とした。

題名は出版社~~のもとより~~（から）「試験別居」の映画の名を冠し■■■■■■（たいいもうしで）があったが~~短篇集~~（これら作品集）の主題と関係がなくもよいので■従うこととした。

「不在」とあるのは手元に原稿がないことを意味するのであろう。当初、由起は「男女の愛情を主題と」する小説集として一書をまとめることを構想していた。メモは、出版社の意向に従う形で映画タイトルと同一表題とし、「特号夫人」を移動して「試験別居」の前に配置、また題名を記した頁の裏に映画原作

30　同様の単行本所収作品に関わるメモは他にもあり、【その他自筆100】に『女の中の悪魔』の場合が見える。

であることを記すという内容である[31]。しかし、実際に刊行された書籍は、「試験別居」が筆頭作品でその題名の頁裏面に映画原作の表示はなく、また作品毎に題名を記す頁もなければ「あとがき」もない[32]。すべては『女ごころ』という表題と、表題とともに読者の目に飛び込んでくる帯とに集約されてしまったのである[33]。

「試験別居」を原作とした映画は、その脚本タイトルが「秘めごと」、「美しき争い」、「妻と愛人」、「女ごころ」と揺れ動いたことから窺えるように、結婚、夫婦の在り方を主題にしながらも、妻という立場の女を主人公とする夫婦の危機の物語から、不倫関係にある女の立場、そして妻を取り巻く女達―女性関係に悩まされた夫が先立ち自立しつつ生きながらも亡夫の弟と秘めた仲にある友人、見合い結婚をする妹等を描き出すストーリーを映像化したものとして制作された。さらにその外縁部には、幼い子供を亡くした過去を背負いつつ夫とつましく暮らす同僚の女性、しばしば家庭の様子を覗きに来る隣家の夫人といった世間の女を代表する眼差しを加え、各階層の、また種々の状況に置かれた女性の点描を重ねた女たちの物語となった。映像作品自体は、ややコミカルな味わいを含みつつ女性の幸せとは何かを問うものとして仕上げられている。

残念ながら、ここまで述べたような作品の映画化をめぐる顛末に対する由起自身の感想や評価は、「文庫」資料の中に確認できていない。

以上、「試験別居」の映画化の周辺を述べた。「文庫」には他にも脚本や梗概

31　単行本に所収されている「奪えぬひと」は由起自身の立案には含まれていなかったものである。同作品は単行本への発表が先行する形となり、単行本刊行後の1959年３月に『主婦の友』43-3に掲載されている。

32　単行本の中には「作者のことば」や「あとがき」を掲載するものもある。

33　1960年に映画化された『夜の肌』も由起の「赤坂の姉妹」を原作とし改題したものであり、1963年に映画化された『あの人はいま』も同じく「罪と愛」の改題であった。「赤坂の姉妹」については、「わが小説　映画の注文に応じて」（『朝日新聞』1961年12月７日付）で、映画制作の企画や雑誌の枚数の都合に合わせて小説執筆が後追いの形になったことを記す。当時の映像化と原作小説との関係性については個別の検討を要しよう。

が蔵されている。これらの検討により得られる知見は、個別の文学作品の映像化に関する事例研究としてだけでなく、当時の他の映像作品の制作に関する論究にも繋がりゆくはずである。

おわりに

本稿では「文庫」資料を用いながら作家由起しげ子について述べてきた。

由起は経済的豊かさに恵まれていたが家庭的な愛情には飢渇した少女時代を送った。結婚生活も心満たすものにはなり得ず、終戦後別居、母子の生活を維持するために作家の道に進んだ。1946年半ばから童話を、そしてそれと並行して1947年６月には「送別」（発表時表題「告別」）を、続けて同年12月以降に「脱走」、1948年後半に「本の話」、1949年前半に「警視総監の笑ひ」を執筆したが、これらの初出誌発刊順は「本の話」「脱走」「警視総監の笑ひ」「告別」であった。

移りゆく時局を生き抜き人生の明暗を自ら知る由起は、1950年代半ば以降、発表作品数が増え中間小説作家としての活躍が顕著になる。しかし由起は男女の愛情の機微を描く作家として年月を重ねつつも、社会というものに対して目を向け続けていた。

長島愛生園に関わる執筆、保健婦や職業婦人へのエールを込めた視線が感じられる文章、豊かな好奇心に満ちた物理学等への興味を綴る書評やエッセイ、さらに松川事件、部落問題への言及、三井三池炭鉱に関わるルポルタージュ等には、小説とは異なる筆致が見える。また自身が新婚時代を過ごしたパリに加え、作家として、インド、中華人民共和国、東南アジア訪問を経験する等、国際派という一面を持つ一方で、著名音楽家のそれにひけをとならい音楽活動に関わる論評があり、作品中に音楽に関する知見が顔を覗かせることもしばしばである。これまで小説に圧倒されて振り返られることのなかった数々の文章の中には、独特の視点や味わいがある。作家自身の姿を捉えた上で読み直すことで、終戦後から高度成長期に至る昭和という時代の価値観や風潮、女性を取り巻く言説を発掘することができる。

没年となった1969年の４月に『資生堂チエインストア』138に寄せた文章中

には、自ら執筆の意義を述べる部分がある[34]。生活のために書き出したが、「ものを書くことは生きている心の姿を映す一つの手立て」であり、「私の経験した人間の愛のどれもが、歓びとともに哀しみや怖れや苦しみを伴わずにはすまなかったように、日々の心の動きは夾雑物と疑念にまみれている。これを映してじっとみつめようとするのが、私にとってものを書くことに現在はなっている」と述べる。個人的体験に裏打ちされた戦争期の混乱の影響色濃い初期作品から、高度成長期の人々の暮らしを映す作品群へと由起の作風は変容する。しかし、ひとすじに続けたいと願っていたものは、人の生きる姿、心を見透し描くことであった[35]。

執筆活動開始期、「送別」を書き終えた時期の独白が「二」でも引用した【その他自筆36】「雑記帳」の1947年７月24日夜に記された箇所に遺る。その一部分のみを引用すると以下の通りである。

> 私にとって書きたいものはもはやたゞ一つになった。そしておそらくそれですべてを書くことになるであらふ。派生的なものを書きたくない。
>
> 私は一人の女がどんなに生きて来たか、その窮様が何をもたらすかをかきたい。それは幸福を、また不幸を暗示するものではない。またその生活を写すことでもない。一人の女が生き、探索し、全生涯をとして戦ひ求めたものが真理より他の何ものでもなく、その真理といふものが、（一字分空白）神と呼ばれ実在或は力と呼ばれるものであるにしても、これまでのあらゆる人の頭脳のなかに考えへられたものではないことは確かである。

---

34 【印刷物３】「道ひとすじ④何かを教えられたいという願いを育てて　作家・由起しげ子」。この随筆については、前掲４吉村論文も言及する。

35 『女性作家シリーズ６森茉莉／由起しげ子／萩原葉子』（角川書店 1998年）所収「作家ガイド」で中地文は、初期作品においては作者と等身大の主人公が掘り下げられず人生または人間社会の一断面を活写するものが小説だと考えられていた、と指摘する。しかし由起自身は「現在」から振り返ってなされた由起自身の一貫して文学観は変わらなかったと主張しているのである。

由起は、文芸雑誌が氾濫する時代の流れの中で作品を書き続けた。とりわけ中間小説に区分される作品には、実に多くの女性の姿が描かれるが、様々な女性たちを描き続けた原点がこの文章中に在る。「私」という「一人の女」が「生きて来た」道のりそのものが、作家由起しげ子の「書く」という行為の原動力であったのだ。

由起しげ子研究の新たな扉は開かれたばかりである。

《付記》 日記等からの引用に際しては、表記は原本通りとしたが、一部の句読点は稿者による。特に改行位置を示す場合は／を用いた。

本稿は2016年度神戸女学院大学研究所の総合研究助成による研究の成果の一部として公表するものである。